

## 宝塚歌劇のあゆみ展：東宝劇場壁画『薫風』下絵展示に寄せて

東宝劇場三階階段ホールに設えられていた壁画『薫風（騎馬婦人群像圖）』。

昭和12年、阪急電鉄創業者であり株式会社東宝劇場の社長、小林一三翁の委嘱によって描かれ、戦時中もしくは昭和33年の劇場火災で焼失したと思われる幻の作品である。

壁画を描いたのは丸井金猷（まるいきんげい）という製作当時27歳だった新進の邦画家。

昭和8年に東京美術学校（現東京藝術大学）日本画科を卒業後（同期生に文化勲章を受賞した杉山寧氏が在籍）、同校研究科を経て「日本画」という枠組には囚われない鮮新なる造形の道を模索し、のちに首相となる公爵近衛文麿氏や、当時愛国生命の社長だった実業家の原邦造氏（邸宅が東京品川の原美術館となったことでも知られる）に作品を買い上げられている。その世界観は古今東西ジャンルを問わない宝塚歌劇と通ずる部分も多く兼ね備えていた。

しかし、時代は戦争へと暗転。金猷の描く時空を超越した婉優典雅な画風は社会にそぐわず、戦時下に画業を離れ、戦後は神奈川県立神奈川工業高校工芸図案科の教諭として、デザインのジャンルで後進の指導に当たるようになる。そのため、画家としての評価は得られずに晩年を迎え、同校退職後に杉山寧氏の薦めもあって再び絵筆を握り始めるも、自身の個展開催の夢は叶わず、昭和54年7月に69歳でこの世を去った。

金猷は画家時代の頃の話あまり身内にしようとしなかったため、妻さだる歿後の遺品整理で初めて金猷の画歴が本人自筆の履歴書等によって明かされ、東宝劇場の壁画を描いていたことも判明する。しかし、残念ながら焼失した壁画についての情報は、その履歴書と東宝の機関誌「エスエス」昭和14年6月号に掲載されたモノクロ写真、そして本展で展示されている壁画と同サイズ（内寸：高さ3m×横幅3.5m）の下絵しか残っていない。

平成9年（1997年）遺族らで金猷の遺作を紹介する展示活動を開始。これまで17回の展示を行い、その活動が実を結んで平成20年（2008年）金猷の故郷である愛知県の一宮市博物館で、館企画の特別展「いま鮮やかに 丸井金猷展」が開催された。毎年秋には東京の谷中で町一帯が展覧会場となる「芸工展」というイベントに参加し、そこで遺作の紹介を定期的に行っている。そうした展示機会の中で東宝劇場の壁画『薫風』に見覚えがあるという方にも何度か巡り逢うことができた。ただし、60年以上も前の話であるだけに記憶も曖昧かつ断片的で、特に遺族が知りたいと思っている色合いについての情報はまだ出て来ていない。

本展でもしこの壁画に見覚えのあるという方がおられましたら「薫風ノート」にどんな些細なことでも構いませんので、ご一筆いただけますと遺族としても幸甚です。また、展示に関するご感想やご質問も歓迎ですので、お気軽にご記入ください。よろしくお願い致します。

ご質問についてはウェブサイト「kingei.org」で回答していく予定です。

遺族代表・丸井隆人（金猷の孫）